

聴力検査

どんな検査？

聴力検査とは、人間の耳にもっとも聞こえやすい周波数の音を中心に7種類の音を用いて、聞こえる最小限の音（最小可聴閾値）を測定する検査です。検査の種類は、気導検査と骨導検査があります。

どうやって検査するの？

検査は雑音を遮蔽した防音室で行います。気導検査は、ヘッドホン（気導受話器）を両耳にあて、いろいろな高さ（周波数）をいろいろな大きさ（音圧）で聞いてもらい、聞こえる最も小さな音を測定します。測定音は「プーッ、プーッ、プーッやピーッ、ピーッ、ピーッ」のような音です。かすかな音でも聞こえている間は応答用押ボタンスイッチを押し続けてもらいます。また、聞こえなくなったときはできるだけ早く放してもらいます。気導検査では、外耳道（耳の穴）を通った音が鼓膜を振動させて、更に内耳～聴神経へと伝わる通常状態での聴力を測定します。骨導検査は耳の後ろに骨導受話器というものを当てて、耳の骨に直接音の振動を加えて内耳以降の聴力を測定します。このとき、反対側の耳にはマスキングと言って雑音を聞いてもらいます。



時間はどのくらいかかりますか？

患者さんに音が聞こえたときに応答ボタンを押してもらう為、患者さんの協力が必要です。そのため、患者さんにもよりますが、約 15 分程度です。

Baby 聴力検査

どんな検査？

生後3日から退院までの間に聴力検査を行っています。
検査は眠っている赤ちゃんの外耳道にイヤホンを挿入し小さな音を聞かせ、その刺激に反応して起こる変化をコンピューターが判断し、音に対して正常な反応があるかないかを調べます（OAE：耳音響反射法）。また、OAEの方法に3個の記録用電極（額、両耳の後ろ）を取り付け聴覚の神経系が発生する電気活性を記録する方法もあります（ABR：自動聴性脳幹反応）。

時間はどのくらいかかりますか？

検査の時に動いたり泣いたりするとうまく結果が出ないことがあります。測定時間はOAE 約5分、ABRは約10～30分程度です。

何のためにするの？

赤ちゃんの生まれつきの難聴は500～1000人に1人の割合ですが、生後4ヶ月以内に治療を始めると、言葉の遅れや発達の遅れを防ぐ事ができると言われています。早期発見のために行っています。乳幼児期中耳炎やおたふく風邪などにより、後で難聴になることもあります。



ここの部分を耳に挿入し音を聞かせます。